經濟發展と外國貿易

北川一雄著

有斐閣

北川一雄著

経済発展と外国貿易

—国際経済動態理論の研究—

有斐閣

著者略歴

一九三二年　名古屋高等商業学校卒業
一九四九年　名古屋大学教授
一九五四年　経済学博士
現　在　名古屋学院大学教授

主　著

国際貿易理論の研究（有斐閣、一九四八年）
国際経済（宮田博士と共著、経済学新大系Ⅷ　河出書房、一九五二年）
ロストウ、経済発展の過程（酒井博士と共訳　東洋経済新報社、一九五五年）
キンドゥルバーガー、ドル不足（有斐閣、一九五五年）
ミュルダール、福祉国家を超えて（ダイヤモンド社、一九六三年）
ミュルダール、福祉国家を超えて、改訳版、（ダイヤモンド社、一九七〇年）

昭和二十八年七月十日　初版第一刷発行
昭和五十四年三月三十日　初版第五刷発行

経済発展と外国貿易
定価三〇〇〇円

著作者　北川一雄

発行者　江草忠允

発行所　東京都千代田区神田神保町二丁目十七番地
株式会社　有斐閣
電話　東京（二六四）一三一一（大代表）
郵便番号（101）振替口座　東京六二七〇番
本郷支店（113）文京区東大学正門前
京都支店（606）左京区田中門前町四四

印刷　内外印刷株式会社
製本　新日本製本株式会社

© 1953, 北川一雄. Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

3063-062661-8611

序

A　本書は、比較的によく耕されてきた国際経済の伝統的静態理論・比較静態理論を乗り超えて、国際経済の長期的・歴史的動態理論を志向している。かかる動態理論を基盤にしてのみ、例えば「ドル不足」問題が表象する世界経済の基礎的不均衡とか、国際的景気変動とかを、正しく分析し且つ適切な政策を考える途が、はじめて開けてくる。国際経済学が静態や比較静態の理論に終始している限り、かかる現実の動態に迫ろうとの要求を充たすことができない。世紀的な世界経済の危機を理論的にとり上げるためには、理論自体が再整備せられねばならないのである。

B　かえりみるに、この方向は多く耕されなかつたとはいえ、必ずしも新しいものではない。しかし、われわれの動態とするところが経済システムの動態と与件の動態との相関性を指している限り、かかる動態がシステムの全体的危機という歴史的現実に即して多くの注視を受け易いことは当然である。そして長期動態理論は、正にこのような危機をも含み上げる歴史的理論たる性格を担つている。

リストが先進正常国民――イギリス――の国際経済秩序と自由貿易主義のうちにおかれた潜勢的正常国民――ドイツ――の危機を一つの歴史的限界情況なりと考えたところから、大きな国民生産力理論と生産力育成原理とを構想したのは（本書第二部）、右の一例である。ここからドイツ歴史学派の主流として歴史的実践的理論がやがて国民経済構造理論にまで展開せられる（第三部）。また、かかる後進追跡国の急進性に拍車せられた国際経済の歴史的危機から、ケインズ派経済学の長期動学化という最近の理論的展開も促進せられていると見ることができる（第六部）。そして、これが第二の例である。しかし、リストがもしみずから英国にあればスミスとなつたであろうと論じたことは、旧古

典学派の代表者たちにも大きな生産力理論が、その自由貿易主義の基底にあつたことをリストが直覚していたことを示している（第一部）。それは炯眼なハロッドがケインズ派経済学の長期動学化に際して、リカードゥの動態理論をケインズの「一般理論」よりも動態的であつたと想起していることに似ている。そして、スミス以下の旧古典学派にこそ、最も重要な先例が見られたのである。

これらの反省からも、われわれの意図が国際経済の長期動態理論を目指す限り、その基礎ずけを奈辺に求むべきかが、おのずから瞭かにせられる。

C　しかし、構造理論という大きな歴史的実践理論にまで進んだリストの途には、始めからいわゆる合理的経済理論への沈潜が弱い。他面ではまた長期動学化を歩み始めたケインズ派経済学は、それが合理的経済理論の進展において大きな歩みを示しつつも、なお与件の動態と経済システムの動態との相関性に迫る歴史的実践性、その他において多くを残している。それは、合理的理論的であつたスミスが対重商主義・対重農主義において示した、資本主義秩序の高度体制化という歴史的展望およびそれと結ばれた自由貿易原理のもつ、歴史的実践性にまでは及ぼうとしない。また、リカードゥやJ・S・ミルが自由貿易原理を、資本主義秩序の定常化という一つの歴史的限界情況克服の実践に即して考えていたという、歴史的実践性をまでは学ぼうとはしないようである。

われわれは本書において、構造理論を深めつつ、その展開のうちに国際経済の歴史的構造的均衡という、量的・質的および空間的・時間的拡がりをもつ均衡を構想する（第四部）。かかる長期動態的全体均衡は、一つには資本主義の自由営利的組織原理における高度体制化という展望――一九世紀的――において一回的・非可逆的に考えられ、次いで計画によつて高次化せられる自由営利的組織原理という過度期を経過しつつ何等からの新しい秩序を展望するという現在の問題としての今一つの歴史的構造的均衡をも、同じく非可逆的に考えようとする。前者が資本主義秩序下の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

長期上昇基調における歴史的構造的均衡であるのに対し、後者は長期停滞の基調における動態的均衡である。本書が前篇と後篇とに分けられた理由はここにある。

しかし、かかる歴史的構造的均衡の内実化に際しては、長期動学化された合理的経済理論をもつてしなくてはならない。それは旧古典学派の代表者たちの国際経済理論、特にその自由貿易理論における長期動態理論を掘り返すと共に、それを彼等の歴史的限界情況に処しての歴史的実践的自己再構成、やがて国際経済再構成の理論として理解することから始められる（第一部）。その限りでは、リストの生産力育成原理の歴史的実践性（第二部）と共通の、大きな構想が彼等にも読み取られる。ひとが自由貿易原理と経済的保護貿易理論とを対立者なりと考え易いことに対して、われわれの理解は一つの批判者として登場し、ここから両理論を綜合するところの、時間的生産力効果を含み上げる空間的国際分業原理として比較生産性原理を構想する（第四部、第十一章）。それはリストの一面を合理的理論に即して定式化しようとしたシュラー、マノイレスコ、グレーアム等（第二部）を、旧古典学派の代表者たちの動態的国際分業原理に立ち帰らしめて定式化しようとするものである。

D　しかるに、長期上昇の基本趨勢の下では、比較生産性原理と静態的比較生産費原理との矛盾は著しくは表面化しない。したがつて、そこでは多くの国について、動態的比較生産性原理が作用し、動態的順特化、即ち生産力展開に有利な国際分業が、自由貿易原理のうちに確保せられる。しかも、生産力展開上の有利さを自由貿易化から期待しえないで動態的逆特化に陥る国も、なお長期上昇期においては国際的フロンティアの大きな展望に支えられて、支配的な国際秩序を突破するという危機対策にまでは立到らない。況んや、資本（労働）移動という直接的・合理的な世界資源利用の途が閉ざされるという危機も現出しない。というのは動態的順特化の展望が、右の如き生産要素移動の効果をつねに有望ならしめるからである（第四部）。

合理的理論は構造理論のもつ生態学的分析からは縁遠いのであるが、与件とシステムとの相関々係を国民資本勘定と国民所得循環との相関性に即して整理するという解剖学には、当初から大きな強みをもつていた。これを開放体系化したものが国際収支表である。そして長期動態理論は、国際収支表のうち二大自主的項目たる経常的貿易勘定と長期資本勘定との長期動態的相関性を、右の国民資本勘定と国民所得循環との関連において分析する。しかるに、かかる関連についての生理学に相当する機能的函数的合理的理論としては、長期上昇期の関する限り、主として経常貿易勘定面での国際分業原理のみが、リスト以下の逆特化意識から動態理論化を迫られている。長期資本移動理論の動態化は、右に述べた長期発展の順調な展望のために、なお断片的な示唆に終始していた。

われわれの長期動態的貿易理論は、動態的にして非可逆的な需給曲線の変化やシフトを含む動態的国際分業原理、動態的外国為替の理論、国際分業効果としての資本蓄積・国民所得の全体系（生産・分配・支出体系）の変動、それと貿易との相関的累積的動態、かかる展開の指標としての動態的生産要素交易条件をめぐる理論等を主軸とし、今後の展開に一つの途を拓こうとするものである。その間に構造理論が、一つの歴史的全体理論としてもつ性格、および、その歴史的段階・類型把握に進もうとする構造与件論・要素論を以て登場し、一方では右の合理的理論に歴史性を与え、他方では却て、合理的理論によつて理論的内実化を受けることになる。この歴史的構造理論と長期的合理的理論との結びつけは、本書の努力を通じて、なお一層の展開をまつている。

E　しかし、国民資本勘定や国民所得循環という解剖学を基礎にもつ新しい生理学は、その理論の主軸に貯蓄と投資とをもち、国際経済の長期上昇的基調を、主導構造における人口増加率・技術的革新・および国外のフロンティアという諸投資誘因、即ち諸成長要因の、長期的活力のうちに見ようとする（第四部）。ここにおいて、フロンティアは主として貿易と資本（労働）輸出とに関わらしめられるのであるが、それらは国際的順特化に際しては他の成長要因

と相促的に強められる。

F　長期上昇の最後の躍進期は通常帝国主義時代といわれるもので、既に一つの過渡期である（第五部）。それは動態的順特化の生み出す生産力展開における国際的不均等に縁由するものであるが、後進追跡国の工業化と資本的自立化における急進性、その先進国への反作用、多軸化した主導国の富有化がもつ自己矛盾、後進第一次産業部門偏倚構造の停滞化と富有国停滞化の相関性から生まれる累積的停滞、およびそれらを契機とする古い国際秩序への否定的傾向等に分けて、理解せられる。経済の政治化・権力化、および先進富有国の国内雇用水準向上に集中する非善隣方策等に見る新重商主義的求心化が、ここに登場する。これが歴史的構造的失均衡である。それは正に世紀的・世界的な歴史的限界情況と考えられる。

かかる長期停滞の国際的関連を知るところにおいて、はじめて長期動学化せられたケインズ派経済学が国際的視野を獲得し、歴史的実践的構造理論と長期動学的合理的理論とを結びつける努力を再生せしめる（第六部）。合理的理論としての成長率理論が漸く旧古典学派の代表者たちのもつていた動態理論を見直し、与件の動態と経済システムの動態との相関性を見る方向への拡充を待つと同時に、それらを通じて輸出入と貯蓄・投資、したがつて国内投資率と外国貸付率という貯蓄・投資の関連を基軸に据え、更に実物資本の形成という本来の資本蓄積理論への拡充を待つこととなつている。

ここにはじめて、輸出入と貯蓄・投資との関連から、国際経済の累積的停滞化を克服する資本移動の動態理論（第六部、第十七章）が示唆せられる。それは、恰も比較生産性原理が長期上昇期においては比較生産費原理の背後において大きな矛盾もなく作用しえた如く、長期上昇期の国際資本移動の背後において自動的に作用していた動態原理なのである。しかしリスト的保護貿易理論の出現によつて、即ち動態的逆特化の限界情況を契機として、比較生産性原

理が気ずかれたと同様に、今や過去における活潑な資本移動の効果が自己否定化した世界的危機において、それを契機としてはじめて、動態的資本移動原理が登場する形をとつている。しかも、長期上昇段階において貿易と資本移動とが自動的・調和的であり易かつたのとは異り、今や比較生産性原理と動態的資本移動原理とが一つの統一体系として、しかも何等かの計画の導入によつて高次化せられる経済秩序をもつてしてのみ、歴史的実践性を得ることができる。すべては、このような歴史的構造的均衡の内実的確保にかかつている。

われわれの資本移動の長期動態理論は、国際貿易の動態理論を含み上げる資本蓄積の開放体系を指向しており、資本移動の動因論・過程分析・効果分析のすべてにおいて、伝統的静態・比較静態分析を超えようとしている。そこには内外所得成長率比較、内外両部門成長率比較、消費財・生産財両部門成長率比較、能率報酬成長率等に関する諸原理が含まれ、構造要素論的段階・類型分析に対する多くの補充を約束している。

G　われわれが経済発展によつて何を指しているかは、これまでにおのずから示された如く、第一に生産力体系としての国民経済構造の開放体系に即して、世界的な歴史的均衡の展望と結びつく。更にそれを合理的理論の開放体系に即して内実化すれば、資本蓄積と国民実質所得水準の向上を意味し、指標的には生産要素交易条件の長期動態的有利化に集約せられる。そしてこの考え方は、スミス以来すべてを通じて、またすべての国の国際経済的発展の指標として、妥当する。

H　本書の企図するところは概ね右の如くである。もとより、久しい間、著しく未耕の領域に踏み込み、また先学の努力のうちに右の如き構想に資する何ものかを得ようと苦しみつつ、なお理論化をまつ諸論点が今後の課題として残されている。その上にわれわれの動態理論を基盤とする国際的景気理論や国際経済の基礎的不均衡への接近が、新しい展開を待つている。大方の鞭韃を切望する次第である。

本書の成るについては、いつもかわらぬ恩師、赤松先生、宮田先生、身近かに酒井先生等の学恩と、国際経済学会につらなる人びと、特に藤井・喜多村・小島諸学兄との間の親しい学問的まじわりとに負うところが多大である。また新庄・塩野谷両教授からは不断のはげましをいただいている。

出版については、有斐閣の出浦栄氏、三輪信雄氏に一方ならぬ御厄介を煩わした。また校正・索引その他について、私の周囲に建元講師をはじめゼミナールの学生諸君、特に河村鎰男君が労を重ねられた。記して厚く謝意を表したい。

一九五三年五月二十日

名古屋　覚王山にて

著　者

目次

前篇　長期上昇の趨勢と国際経済の歴史的構造的均衡……一

第一部　古典学派自由貿易理論の動態的解釈……三

第一章　「国富論」における外国貿易と経済発展の動態……三

第一節　開題……三

第二節　動態的国際分業原理……五

第三節　金分布論と輸出入の非直結性……八

第四節　国際バランスと国内バランス……一三

第五節　輸出と分業との累積的効果……一六

第六節　分業体系と生産要素交易条件の動態……二三

第二章　リカードゥにおける外国貿易の動態……二六

第一節　開題……二六

第二節　リカードゥの定常状態観……二八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第三節　輸入の動態的効果……三四
第四節　後進国の在り方……三九
第五節　上昇への長期趨勢……四三
第三章　国内所得分配の変動……四六
第一節　開　題……四六
第二節　静態についてのヘクシャー―オリーンの定理……四七
第三節　動態との関連……五五
第四章　J・S・ミルにおける外国貿易の動態分析……五九
第一節　開　題……五九
第二節　静態と動態……六三
第三節　定常状態観とその相殺力……六五
第四節　生産要素交易条件……七二
第二部　国民生産力と保護貿易の理論……八一
第五章　リストの国民生産力理論と育成原理……八一
第一節　開　題……八一
第二節　歴史的・実践的国民生産力理論……八五

第三節　発展段階と外国貿易の動態……九三
第四節　自由貿易理論批判……一〇四
第五節　後進工業力育成原理……一一一
第六節　長期発展の趨勢……一一八
第七節　結びと展望……一二三
第六章　シュラーによる保護部門選択の原理……一二四
第一節　開題……一二四
第二節　自由貿易と保護貿易との部門別理論……一二五
第三節　供給弾力性の部門別・国別類型と段階……一二九
第四節　シュラー批判と反批判……一三三
第七章　マノイレスコの生産力理論……一三九
第一節　開題……一三九
第二節　基軸としての「生産性」概念……一四〇
第三節　国際分業原理の一般的シェーマ……一四三
第四節　マノイレスコ批判と反批判……一四五
第八章　グレーアムによる逓減生産費の導入……一五〇
第一節　開題……一五〇

第二節　逓減コストを導入した比較生産費原理……一五二
第三節　グレーアムの保護主義……一五五
第四節　グレアム批判と反批判……一五九
第五節　外部経済論……一六三

第三部　開放体系における国民生産力理論の展開……一七三

第九章　対外経済構成の全体観……一七三
第一節　開題……一七三
第二節　国民経済の全体的把握……一七四
第三節　国民経済の環境適合……一七六
第四節　国民自主の対外経済構成……一八〇
第五節　再吟味……一八四

第十章　対外経済構成の構造理論……一八八
第一節　開題……一八八
第二節　開放体系における構造与件と構造要素……一九一
第三節　対外経済能力とその実現度……一九八
第四節　国民経済構造と対外経済の動態的作用関連……二一三

第四部　長期上昇の基調における国際経済の歴史的構造的均衡……二一七
第十一章　動態的国際分業原理の展開……二一七
第一節　開題……二一七
第二節　動態的順特化と双方的順特化……二一九
第三節　動的逆特化と輸入工業国民化の国際的波及……二二三
第四節　動態的比較生産性原理へ……二三七
第十二章　長期上昇の趨勢と歴史的均衡……二四五
第一節　開題……二四五
第二節　長期上昇の趨勢と成長要因……二四七
第三節　英国をめぐる若干の考察……二五七
第四節　長期上昇期の国際的歴史的均衡……二六八
後　篇　長期停滞の趨勢と国際経済の歴史的構造的均衡……二七七
第五部　過　渡　期……二七九
第十三章　後進追跡国と構造的矛盾の展開……二七九

第一節　開題……二七九
第二節　後進高度工業化国の発展速度……二八二
第三節　後進高度工業化国の資本的自立……二八六
第四節　国際的反作用……二九三
第十四章　後進低開発国と構造的矛盾の展開……二九七
第一節　開題……二九七
第二節　第一次産業順特化国の不安定性……三〇〇
第三節　半資本主義構造の停滞……三三三
第十五章　権力と外国貿易……三三五
第一節　開題……三三五
第二節　権力経済と外国貿易の量的・質的変化……三四三
第三節　外国貿易に固有なる権力効果……三四九
第四節　大国の小国選好度および小国貿易の集中度……三五五
第五節　伝統型外国貿易と権力政策……三六四
第六部　長期停滞の基調における国際経済の歴史的構造的均衡……三八三
第十六章　成熟停滞と停滞の世界性……三八三

第一節　開　題……三八三
第二節　成熟停滞の理論的規定……三八八
第三節　成熟の開放体系と停滞の世累性……四〇八
第十七章　長期停滞の趨勢と歴史的均勢……四二三
第一節　開　題……四二三
第二節　成熟国長期均衡の国内対策……四二五
第三節　出超率と国民所得乗数論……四三二
第四節　動態的資本移動理論へ……四三七
第五節　資本移動と国際分業の動態的統一理論体系へ……四七一
第六節　長期停滞期の国際的歴史的均衡……四八四
索　引……（巻末）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com